

編集委員会委員

中田信哉 | NAKADA, Shinya

神奈川大学経済学部教授

いくつかのことを取り上げて最後にあることを申し上げたい。神奈川大学経済学部の同僚に田島佳也さんという教授がいる。商業史が専門だが、北海道出身ということも関係しているのか「北前船」の研究をしてきており、その道では有名である(と本人は言う)。田島さんから北前船の話を書く。北前船という近世前期において日本海海運に用いられた北国船の上方での呼称であり、江戸時代、つまり、近世中期以降、北回り航路にもちいられた弁財船型の回船を呼ぶようになったものである。現在では北周りの北国回船の全体をそう呼ぶようになっている。「きたまえぶね」あるいは「きたまえせん」という語感も夢を呼ぶがその活躍も魅力的である。

話は変わって私の大学時代に所属した研究会(ゼミナール)は羽原又吉研究会といい、羽原先生は「漂流海民」などの研究業績は山ほどあるが個人的資料が少ない。田島さんに言わずと昔の経済史とか民俗学の偉い先生の中には業績はともかく個人的来歴のはっきりしない人が多いそうである。田島さんは新潮社の仕事でこの羽原先生の評論をすることになったがキャリアがどうもはっきりしない、ということで私は大学のゼミの文集などを貸してあげたりした。文集の前書きのところで老人だった羽原先生はキレギリに個人的なことを書いておられたからである。

更に話は変わり、現在の私の勤め先の前任者は山崎吉雄先生という人であった。東京産業大学時代の現在の一橋大学を出られて長い間、山形大学の教授をされていた。ところが定年を目前にして推されて(娘婿は『おだてられて』と言う)、山形県知事選に出馬された。革新系候補の史上最高得票で見事に落選された。そして、誘われて神奈川大学に来られたが専門の「産業論」がないために「商業学」を担当しておられた。非常勤だった私によく「最近の流通経済だのマーケティングはよくワカン。あんた、私の代わりにゼミの演習をしてくれ」などと言われた。

この山崎先生は山形大学時代はもっぱら酒田の本間家の研究だけをしておられてあまりに本間家に入り浸るので「お出入り禁止」になったくらいだと言う。山崎先生からは本間家の話をよく聞かされた。先の田島さんから能登の時国家の継続的研究の本を頂いた。本間家にしる、時国家にしる、日本海側にはこうした豪商が生まれている。

もうひとつ別の話をしたい。この度、経済産業省からODA

担当として外務省に行かれる古田肇さんが商政課長時代、私に「今度、東北のA県の商工労働部長(この時は次長)でうちから行ったF君が県内流通関係企業で構成した協同組合の共同配送問題で苦労しているから手伝ってやってくれないか。F君は中田さんの大学の後輩だ」と言われた。大学の後輩は関係ないと思うが他ならぬ古田さんの頼みなので1~2か月に一度、1泊2日でA市へでかけた。しんどい話であったがひとつだけ楽しみがあった。

A市でSというアンティーク・ショップを見つけたのである。1階がだだっ広いジーンズ屋であり、2階は店主の奥さんが経営する1階と同じ床面積の骨董屋さんだった。その店は東京でも見られないほどの古伊万里の品揃えを誇っていた。「東北の日本海側は古伊万里の宝庫だ」と奥さんはいう。

北前船は蝦夷(北海道)の海産物を大量に上方へ運ぶ。河内の綿生産は蝦夷の魚粕を肥料として大量に必要とした。現在でも大阪や沖縄は日本有数の昆布消費地である。この昆布は蝦夷から来たものであり、どれだけ大量に継続的に持ち込まれていたかがわかる。

江戸時代の回船は和船であり、構造船でないから片道を空荷で運行することはできない。航海の危険がある。したがって、蝦夷からの海産物、本間家が得意とした山形の紅花などの北からの輸送に対して北へ行く時には何かを積んでいく必要がある。多くの物資を積み、寄港地ごとの商売をする。その中に大量の陶磁器があったという。それが現在、東北の旧家の蔵から出て骨董屋に出回るのである。

北前船は輸送機関であり、交通手段である。それがどれだけのことをしてきたのか。日本がアジアに先駆けて近代化を行った背景に国全体を覆う「商品経済」あるいは「流通経済」のネットワークが完成していたことを上げる人は多い。近代文明の技術や施設を取り入れても商品経済の基礎がなければそれは幻想にしか過ぎないだろう。

交通や運輸はそれが社会のベース、つまりインフラであるが故にそこから生まれる多くの文化や流通や生活に思いを馳せる必要があるのではないか。本誌に投稿される交通や運輸の論文においても紙幅の関係で取り込むことはできないであろうが少なくともその背景にある大きなものを意識し、知覚し、理解し、空想し、夢を持って取り組んでほしいと考えている。